

自然が届けるおくりもの ～愛する自然と乳牛と共に～

熊本県立農業大学校 農学部 畜産学科 2年 原賀 美加

“スーちゃん”当時6か月齢だったこの子牛が、非農家で酪農とは無縁だった私の人生を大きく動かします。ナンエン・プリンセス・ファイター・スカイシーと名づけたこの子牛、私に乳牛と酪農の魅力を与えてくれました。高校1年生の時、初めて任された担当牛がスーでした。その当初はまだ名前が付いておらず2467号と呼んでいました。その後、先生から名前をつけていいと言われて、自然が大好きな私は、大好きな2467号牛に空(sky)と海(sea)から名前をとってスカイシー(skysea)と名づけました。名前を自分でつけるととても愛着がわきスーにいつも会いたくて、毎日のようにスーを洗ったり、散歩したり、牛房を掃除したりと放課後が楽しみで楽しみで仕方ありませんでした。スーは、初めて牛を育てることが大変だけど楽しくて毎日が充実することを教えてくれました。いつか、酪農家になることが自然と将来の目標となっていました。

しかし、毎日、牛舎に通うなかで、牛という家畜が、犬や猫のような愛玩動物ではなく、経済動物だということに気付かされます。ある1頭の搾乳牛が滑って事故をおこし起立不能になってしまいました。獣医さんにも、あと1週間で立たなかったら淘汰した方がいいと言われました。1週間、当番の人や先生、先輩、後輩と一緒に治療やリハビリをしましたが、タイムリミットには間に合わず、立てないどころか採食量、飲水量も減り、ちゃんと座る力さえ残っていませんでした。屠畜場に運ばれる日の早朝、電車がいないため母に約17km離れた学校まで車で送ってもらい、最後のマッサージに行きました。「お願いだから立って!!」と心で言いながらずっとワラで肢をさすりました。結局、最後まで立てなかったのもので、その牛は淘汰されました。いつもは楽しい放課後の当番。しかし、いつもの場所にその牛の姿はなく、助けることの出来なかった悔しさと、もっと何かできなかつたのかという後悔、そして牛が淘汰されてしまった悲しさに涙があふれて止まりませんでした。それでも、他の牛たちのためにいつもの当番の作業をしなくてはなりません。初めて、酪農の辛さ、苦しさを知りました。それまで、きらきらしていた酪農の世界が初めて曇って見えました。受胎率が低くなった、乳量が落ちてきた、治療しても治らない、利益が出ない牛は淘汰しなくてはならない現実に悲しむ暇もなく、毎日、飼養管理をしなくてはならない世界に少し迷いを感じていました。そんな時、ある出来事が起こります。それは新たな命の誕生。2年生の終わりにスーがついに子牛を産んで搾乳牛になりました。そこで、新たな酪農に気がきます。それは、命の誕生から牛乳の生産が始まり、親牛の最後は牛肉となり私たち人間の命を繋ぐ。この命の繋がりをじかに感じることでできるのは酪農しかない。今まで、辛いと思っていたことは、実際には命の繋がりの中で無くてはならないものでした。この命の繋がりを知って“もっと乳牛と関わりたい!酪農の世界で生きていきたい!”という気持ちは

以前にもまして強くなりました。

私に酪農の魅力を教えてくれ、今では立派に搾乳牛として活躍しているスーちゃんとも別れ、私の人生を大きく変えた高校生活が終わりました。そして、大好きな酪農を専門的に勉強し、技術を学ぶために、熊本県立農業大学校に入学しました。農大では、搾乳の方法や飼料給与法がTMRだったりと高校とは全く違った経営です。作業もそれまで、手作業だったのに対し機械を使って行う作業が多く、より実践的に学んでいます。

そんなある日、私はある一冊の本に出会います。それは、北海道の開拓時代にある方が牛で山を拓き酪農経営をするというものでした。その経営方法として山に牛を放牧させ、牛が本能のまま、つまり、牛が本来の姿で生き、その中で人間が牛乳もらうという方法で酪農を経営する山地酪農というものでした。山に放牧するため、牛のカロリー消費が多く、乳生産はあまり期待できません。しかし、本当の自然の黄色い牛乳を生産することが出来ます。さらに、放牧のため、飼料の自給率も高く、また、蹄耕法と名づけられた、牛で草地をつくるという人間の労働力を削減できる効率的な方法が使われていました。この経営方法は、ニュージーランドの飼養形態に似ており、ニュージーランドから来た指導員の方も“半永久的に続けることができる持続性のあるスタイルだ”とほめて行かれたそうです。また、輸入飼料を給与しないため、BSEや飼料代高騰にも経営はびくともしなかったそうです。しかし山地酪農には、酪農の技術だけでなくもっと牛の生態、山のこと、有毒植物のことなどいろいろな知識、牛を満足させる広大な敷地、労働力が必要とされます。そのため、全国で数件の酪農家しか山地酪農をしておらず、熊本ではまだ山地酪農という方法は取り入れられてません。まだまだデメリットが多く全然普及していない方法ですが“こんな酪農家になりたい”と考えている自分がいました。一番の魅力は自然との共存でした。熊本はたくさんの自然にあふれています。その自然を生かした方法で酪農ができる。私にとってはとても魅力のあふれる経営方法です。自然には人や動物を癒す力があります。小さい頃から木や土などにふれて育った私は、自然にふれること、見て感じるのが大好きでした。夏の暑い日、森林の中を自転車で駆け抜けると木々が作り出した涼しい風を体全体で感じる事ができます。山に登ると雲を近くに感じ、風に揺れるスキが夕日に白く輝いて心が洗われるのがわかります。自然は言葉では表現できない力を私たちに与えてくれます。そんな自然と触れ合って力をもらい生活してきた私にとって山地酪農はとても魅力的です。大好きな乳牛とともに自然の中で暮らし、国産飼料100%、自然100%の黄色い牛乳を生産する酪農家になるのが目標です。

そのために、まず卒業後は同じような経営方法に取り組んでいる酪農家に就職し、今までとはまったく違う酪農を5年間で、体で覚えます。そして、25歳で就農することを現在目指しています。しかし、他国より地価が高い日本。どこで60haの土地を入手するのか。私にはこの大きな壁があります。そこで、着目したのが阿蘇の荒廃地。草原の景観を守ろうとする県が

今、この荒廃地を草原にしようと一生懸命にさまざまな事業に取り組んでいます。そこで、その荒廃地を利用し開拓後、牛を放牧し、蹄耕法により草地の形成を行います。ニュージーランドでの放牧面積は1頭あたり1haを指標としています。それにならい、約40haを放牧地とし、後の20haを採草地とします。その後、数年間で搾乳牛も30頭から60頭に規模を拡大するのに比例して土地も100haまでに拡大させたいです。5月に行った市場ニーズ研修では、消費者が牛乳に求めているものを知ることができました。昨年のもとの原産問題で食の安全性がかなり強く要望がありました。その中で、牛乳の産地や、牛に食べさせている飼料、さらに飼料作物を育てる土まで安全なのかと問い合わせがあったようです。食糧自給率が下がる中で求められる食の安全性、消費者の不安を少しでもなくし、国産飼料100%の安心して飲める牛乳、そして笑顔届ける酪農家になりたいです。

非農家が酪農経営を一から始めるには並大抵の努力では実現できません。だから、私は“山地酪農”をという夢を実現させるために必要なことを全て自分の知識・技術としてみにつけるため人並み以上に努力します。私は絶対に大好きな故郷である熊本で、大好きな乳牛と共に山地酪農をします。山に乳牛に人生を捧げ、自然と共に愛情込めて乳牛を飼養管理します。そして、その乳牛から生産された牛乳を飲んだ人が笑顔になり、その輪が広がっていく……。牛乳で笑顔と癒しを全国に届けます。酪農の魅力を教えてくれたスーに恥じない人生を送るために。
